

# 「個」としての自己と「エスニック」としての自己との間で

——在日韓国・朝鮮人エスニック・アイデンティティの「いま」を問う——

金 知榮

本論文は、1980年前後に生まれた在日韓国・朝鮮人を対象に、若い世代のもつエスニック・アイデンティティの「いま」を明らかにすることを目的とする。1980年前後に生まれた在日韓国・朝鮮人は、1970年代から1980年代まで繰り広げられた権利擁護運動や国際人権規約の批准によって国籍による行政的・制度的差別をほとんど経験したことのない世代であり、2000年以降「韓流」や「拉致事件」などで「祖国」イメージが大きく分岐した時期に就職やアルバイトなどを通して日本社会を経験した世代である。本論文では、こうした時代状況に着目し、若い世代のもつエスニック・アイデンティティの「いま」を「個」と「エスニック」という2つの軸で分析した。その結果、「個」の側面で安定している多くの若い世代が「エスニック」の面において不安を経験し、その不安が日本と「祖国」との緊張関係を通じた日本社会内での「負」のイメージに起因することがわかった。

## 1 問題提起

2003年以降日本社会は前例のない「韓流ブーム」を経験し、その「ブーム」によって日本社会には、大韓民国（以下、韓国）に関する肯定的なイメージが広がりつつある。また、日本で韓国が再評価されていくのとほぼ同じ時期に、日本と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）との関係は、「拉致事件」が報じられたことをきっかけに緊張関係へと向かうようになり、その緊張は、今日まで続いている。日本における韓国と北朝鮮のイメージが大きく分岐していったことを在日韓国・朝鮮人の立場から考えてみれば、2000年以降の動きは、彼/彼女らのもつ「祖国」イメージに変化をもたらしたものであったことがわかる。そして、日本社会における「祖国」イメージの変化が在日韓国・朝鮮人のもつ「祖国」意識やアイデンティティに及ぼした影響についてすでに多くの研究者が分析を行っている（岩

淵 2004, 2007; 板垣 2008; 宋 2008; イ 2008)。そのなかでも日本人との関係性がますます密接になっている在日韓国・朝鮮人の若い世代にとって日本社会で作られた「祖国」のイメージは、曹慶鎬（2012）が分析したように彼/彼女らが実際にもっているイメージよりはるかに影響力の強いものであり、その点において韓国と北朝鮮の相反するイメージが拡大再生産されている2000年以降の動きは、それ以降に日本社会で働き始めた世代にもっとも影響を及ぼしていると考えられる。

ところが、在日韓国・朝鮮人の若い世代に影響を及ぼした変化は、2000年以降に限られるものではなく、すでに1970年代から徐々に表れていたものとして捉えなければならない。特に、1970年末から1980年代までは、在日韓国・朝鮮人の世代交代を通してそれまで「祖国」とのつながりのなかで自分を位置づけていた思想から離れ、日本で生きるための権利を求める新し

いアイデンティティが模索され始めた時期であった。そして、1980年代に国際人権規約<sup>1</sup>を批准することによって国籍による行政的・制度的差別が緩和されていくなかで1980年代末からニューカマーが急増し、在日韓国・朝鮮人を取り巻く環境がさらに変化を遂げていく。この過程のなかでこれまで日本社会内でマイノリティとしてしか認識されてこなかった在日韓国・朝鮮人も、日本社会における外国人の権利問題を先に経験した「ノウハウ<sup>2</sup>」をもつ人びととして認識されるようになった。

2000年以降の変化が在日韓国・朝鮮人の若い世代に大きな意味をもつのは、こうした1970年代から1990年代までの変化を土台しているからである。ところが、先に述べたように、2000年代以降の変化が在日韓国・朝鮮人に与えた影響の大きさや内容について論じた研究は少ない反面、国籍による行政的・制度的差別が緩和され、外国人がもはや珍しい存在ではなくなった時代に育ち、「祖国」のイメージが大きく分岐した2000年以降にアルバイトや就職を通して日本社会に入っていた、1980年前後に生まれた世代に注目した研究は多くない。

以上のような問題関心から出発し本論文は、時代性を帯びている、2000年以降に就職やアルバイトなどを通して日本社会を経験した在日韓国・朝鮮人の若い世代の語りを手がかりに、エスニック・アイデンティティの「いま」を問うていきたい。本論文における議論のながれは、以下のとおりである。

まず、2章では、世代間のアイデンティティの差異を明らかにしようと試みた研究と世代内の多様化に焦点を合わせた研究を軸に、これまで在日韓国・朝鮮人のアイデンティティに関する議論がどのように展開されてきたのか、そのながれをまとめていきたい。

次に、4章と5章では、在日韓国・朝鮮人の若い世代のもつアイデンティティの特質を探っていくために、アイデンティティのレベルを「個」と「エスニック」という側面に分け、それぞれのレベルで2000年以降の変化が及ぼした影響を論じていく。

## 2 アイデンティティ論にみる在日韓国・朝鮮人

在日韓国・朝鮮人のアイデンティティが注目され始めたのは、世代交代が行われた1970年代以降である。独立・分散の傾向が強かった2世、3世が在日社会の中核になるにつれ、民族教育の経験をもたない人びと、日本国籍に帰化する人びと、日本人との結婚する人びとなどさまざまな背景をもつ在日韓国・朝鮮人が現れるようになった。そして、こうした在日韓国・朝鮮人の置かれた環境の多様化は、アイデンティティ論にも影響を及ぼし、アイデンティティ論も次第に多様化していく。

本章では、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティに関する研究が世代間の違いを認識することから出発したことに着目し、世代間のアイデンティティの差異を明らかにしようと試みた研究から世代内の多様化に焦点を合わせた研究までのながれをまとめながら、こういう変化をもたらした要因について考察していきたい。

まず、世代間の差異を意識したアイデンティティ論をみてもみると、その多くは、「祖国」とのつながりを強く意識し、日本を「仮寓」の地として考えていた1世の意識から大きな影響を受けていたことがわかる。たとえば、在日1世である姜在彦(1996)は、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティを「祖国」との関係によって説明し、世代交代の意味を「祖国」へのイメージがきわめて薄い層の増加として捉えている。ま

た、在日韓国・朝鮮人の世代交代による民族意識の風化と「祖国」離れの傾向を判断しうるもっとも決定的な要因として、南北統一への明るい見通しと民族的総和運動を挙げるなど、「祖国」をアイデンティティの根幹として挙げていた。

「祖国」とのつながりを強調する議論は、2世と3世を「祖国」を知らない世代として位置づけた金賛汀（1977）の研究からもみることができ。金は、在日韓国・朝鮮人2世の多くが自民族の歴史から断絶された状態に置かれていると述べながら、貧困な親を通して知る朝鮮人の概念と日本人から植えつけられた差別と偏見のなかで民族を自覚し誇りをもつことの困難を指摘している。ところが、金は、「同化」を受け入れ日本に帰化することが民族にとって屈辱の歴史をそのまま受け入れることに等しいと主張し、「同化」と帰化を批判している。

金敬得（2005）の場合も、1世が植民地時代にもっとも赤裸々な形で差別と同化の圧力を受けたにもかかわらず、韓国・朝鮮人としての匂いをもっとも濃厚に有していたことに注目しながら、日本社会への同化と帰化を批判している。金は、1世が苛酷な差別と同化にさらされながらもなお失わなかった民族性を、生まれながら根こそぎ奪われたのが2世であると指摘しながら、「同化」の圧力から抜け出し、民族性を奪還することこそが在日韓国・朝鮮人の人間性回復へとつながると主張した。

在日韓国・朝鮮人のアイデンティティを世代間の意識の差異という側面から捉えた研究の多くは、帰国志向が強く「祖国」とのつながりを重視していた1世の民族意識から影響を受けていた。そして、民族意識の度合いによってのみ説明されるアイデンティティ論において、日本社会への同化と帰化は、主な批判の対象になっていたことがわかる。ところが、「祖国」との

つながりを強調する議論がなされる一方で、現実では、1959年から始まった「帰国事業<sup>3</sup>」や1965年の「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」の締結などを経ながら日本を「定住」の地として受け入れる在日韓国・朝鮮人が徐々に増えていき、日本で生きるための生活にかかわる権利を求める動きも現れるようになった。そして、在日韓国・朝鮮人を取り巻く環境の変化にともなう意識の多様化は、アイデンティティ論にも少なくない影響を及ぼした。そのなかでも、1970年代から1980年代に繰り広げられた権利擁護運動のなかでよく使われていた「市民権」という言葉は、アイデンティティの軸が「祖国」から「日本」へ移っていったことを示す同時に、日本で生活の権利を求めていきながらも「外国人」として生きる「在日<sup>4</sup>」志向という新しいアイデンティティの在り方の登場を明らかにするものであった。

権利擁護運動を「市民権」の角度から捉えたChapman(2008)の研究は、在日韓国・朝鮮人のもつ新しいアイデンティティの在り方を考える上で示唆的である。Chapmanは、権利擁護運動の始まりともいえる1970年代の日立就職差別反対運動が日本社会への帰属(belong)を求める在日韓国・朝鮮人の熱望(desire)を公的に表現した事件であったと分析している。彼は、この運動のプロセスのなかで在日韓国・朝鮮人自身が日本の外部者(outsider)という観点から日本社会への帰属感と定住問題を論じる内部者(insider)という観点へと移り変わっていたことを指摘しながら、当時の在日韓国・朝鮮人がローカルな日本人コミュニティへ貢献しているメンバー(contributing members)として自らを位置づけるようになったことを重要な変化として捉えている。Chapmanの分析が明らかにしているように、権利擁護運動の過程のなかで現れ

た「在日」志向という新しいアイデンティティの在り方は、それまでもっぱら「祖国」とのつながりを通してアイデンティティを求めている在日韓国・朝鮮人が自ら日本社会に向けて日本社会への帰属を求め、日本人コミュニティへの貢献者としての自分を積極的に主張していた点において従来のアイデンティティ論と異なっている。

1970年代から1980年代まで繰り返された権利擁護運動を通して可視化されるようになった在日韓国・朝鮮人の新しいアイデンティティの在り方に関する議論は、世代間の違いだけでなく、世代内の多様な在り方にまで目を向けるようになった。そして、この変化を導いた研究として福岡安則(1993)の研究を挙げることができる。

福岡は、一口に在日韓国・朝鮮人と括られてしまいがちな在日韓国・朝鮮人の若者たちの存在と意識の在り方が実際には多様であると述べ、従来の民族意識を強固に維持していこうとするタイプと日本社会への「同化」を強めていくタイプとの二極分解といった構図で在日韓国・朝鮮人のアイデンティティの在り方を捉えることの限界を指摘した。福岡は、アイデンティティの多様な在り方を捉えるために、朝鮮人の被抑圧の歴史への重視度と日本社会における自己の成育地への愛着度という2つの軸を中心に、日本人と共に生きることを目指す「共生志向」、「祖国」の在外公民として生きることを重視する「祖国志向」、個人の自我実現を求める「個人志向」、帰化などを通して「日本人」になろうとする「帰化志向」という4つのタイプを作り出した。これに「共生志向」と「祖国志向」の中間に位置づく「同胞志向」を加えた5つのタイプに整理された福岡の類型論は、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティをめぐる議論を「祖国」への意識・民族的感覚や日本への同化という両極端の選択肢から脱皮させたところにその意義がある。また、この5つのタイプが成り立

った背景に1970年代から1980年代まで繰り返された権利擁護運動のながれが存在していたことも注目しておこう。

これまでみてきたように、在日韓国・朝鮮人のアイデンティティをめぐる議論は、「祖国」とのつながりを強固に維持していた1世の民族意識に影響を受けた世代論から、日本での定住が現実になり始めた世代のもつ日本社会への帰属意識までを視野に入れた世代内のアイデンティティ多様化論まで「軸」そのものが大きく動いてきた。特に、この議論の移り変わりに少なくない影響を及ぼしたのが1970年代から1980年代まで繰り返された権利擁護運動の経験であったことは注目に値する。以下、本論文では、権利擁護運動の経験が在日韓国・朝鮮人のアイデンティティをめぐる議論に及ぼした影響を議論の土台にしながら在日韓国・朝鮮人の若者のもつアイデンティティの「いま」を分析していきたい。

### 3 研究対象と研究方法

以上のような問いを分析していくために、本論文では、1980年前後に生まれた在日韓国・朝鮮人を研究対象として選んだ。本論文で1980年前後に生まれた世代に焦点を合わせている理由は、次のような2つの側面から説明することができる。

第一に、1980年前後に生まれた世代が経験した時代の特徴である。彼／彼女らは、上で言及したように1970年代から1990年代までの在日韓国・朝鮮人をめぐる状況が質的变化を遂げていくなかで生まれ育った世代として、国籍による行政的・制度的差別が緩和され始めた時代にエスニック・アイデンティティを構築してきた世代である。また、1980年前後に生まれた世代は、日本社会と「祖国」である韓国・北朝鮮

＜表 1＞ インタビュー対象者 属性表

性別	生年	世代*	国籍	民族学校経験有無	家庭以外のところで 本名を使い始めた時期	本名使用		
						在日集団	その他	
A	女	1976	三世	朝鮮(記号)	経験なし	在日団体の参加後	○	X
B	女	1977	三世	韓国	民族学校、日本の大学	生まれたときから	○	○
C	男	1979	三世	韓国	経験なし	生まれたときから	○	○
D	女	1980	三世	韓国	経験なし	大学入学後	○	○
E	男	1982	三世	朝鮮(記号)	民族学校、日本の大学	生まれたときから	○	○
F	女	1982	三世	日本	経験なし	在日団体の参加後	○	○
G	男	1983	三世	韓国	経験なし	大学入学後	○	○
H	女	1987	三世	韓国	民族学校、朝鮮大学校	小学校の頃から	○	○

\*世代は父親の世代に基づいて作成したものである。

との関係が大きく変化した2000年前後にアルバイトや就職活動などを通じて日本社会で働き始めた世代として、日本社会がエスニック・アイデンティティの構築過程に及ぼした影響を明らかにしていくための重要な対象である。

第二に、1980年前後に生まれた在日韓国・朝鮮人の世代的な位置を挙げるができる。1980年前後に生まれた世代の多くは、前章でも述べたように在日韓国・朝鮮人のアイデンティティについて論じたこれまでの研究のなかで「祖国」志向から離れた世代、「祖国」を知らない世代として表象される3世である。「祖国」に関する原初的感覚や実感をもっていない点においては2世と同じであるが、国籍による制度的・行政的差別をほとんど経験したことがなく、定住志向が確立された環境のなかで育った3世のもつ「祖国」との心理的距離感は、2世と違う文脈で考えなければならない。「祖国」と一定の心理的距離を保ちながら成長してきた世代にとって2000年以降に日本社会のなかで経験した韓国と北朝鮮に関する評価や認識の変化は、どのくらいの影響を及ぼすものであったのか。また、国籍の保持・本名の使用などで自分のルーツを明らかにしながら生活している場合には、2000年以降の変化をどのように受けとめているのだろうか。

本論文では、1980年前後に生まれた世代のも

つ以上のような2つの特性に着目し、日本社会の変化が彼/彼女らのもつエスニック・アイデンティティの構築過程に及ぼした影響を語りの分析のなかで探っていきたい。本論文で分析する語りは、筆者が2008年から2010年まで行ったインタビュー調査に基づいている。筆者は、2008年に在日韓国・朝鮮人の「韓流」経験を「祖国」メディアとの接触として捉え、質問紙調査とインタビュー調査を行った(金, 2010)。本論文では、その調査の過程で実施した生活史に関するインタビューから1980年前後に生まれた在日韓国・朝鮮人の語りを選び、分析対象としている。インタビューは、インタビュー対象者の子どものときから今までの成長過程を自由に語ってもらう形式で進めていた。研究対象の属性は、＜表 1＞の通りである。

#### 4. 「個」としての自己——「共有」された記憶と「経験」される現実の間で

本論文で研究対象としている1980年前後に生まれた世代の親のほとんどは、2世にあたる。その世代が日本社会に進出しようとしていた1960年代から1970年代は、個々人がもっている能力というよりは、「朝鮮人」であるがために受ける「差別」がまず議論の中心にあった。そ

のなかでも就職差別問題は、これから日本で生きていく世代にとって生計にかかわる深刻な問題として認識されていた。その時代を生きていた在日韓国・朝鮮人2世に関する研究のなかには、当時日本の大学を出ても自分の専攻を活かす就職先がみつけれず、販売業や飲食業に従事せざるを得なかった経験や、生計のために帰化を「選択」した人びとが日本人になろうとしてもなりきれなかった語りなどが多数存在している<sup>5</sup>。

ところが、1980年代末以後の日本社会は、国際人権条約の批准をきっかけに1970年代から1980年代にかけて繰り広げられた権利擁護運動の成果が可視化されていくとともに、「労働力」として多くの外国人を受け入れることによって外国人「労働力」に対する評価も徐々に高まっていた。1980年代前後に生まれた世代にとってこうした日本社会の変化は、以前の世代とは「質的」に違うエスニック・アイデンティティの形成を可能にしてくれた要因でもあった。

ところが、上でも述べたように、1980年前後に生まれた世代は、親世代が経験していた差別を記憶という形で「共有」しながら成長している。国籍による差別の緩和された環境で育ちながらも、親世代が日本社会のなかで経験した差別の記憶を受け継いでいる世代にとって、在日韓国・朝鮮人というルーツを明らかにしながら社会に進出することは、世代を超えて「共有」されてきた差別の記憶に挑戦していくことに等しい。在日韓国・朝鮮人の若い世代にとって受け継がれてきた記憶は、どのくらいの拘束力をもったものだろうか。彼／彼女らの経験と親の記憶はどのようにぶつかっているのだろうか。次のGさんの語りをみてみよう。

G：で、就職活動するときに、バイトでは〇〇〇で、ゼミでも〇〇〇だったんだけど、

……2年前か、2年前に、親にも、当然就職だから、相談するんだけど、親は当然、そんな韓国名で、あの日本の企業なんか受かることがないと思ってたから、昭和の人たちだから、(笑う) 昭和的な価値観をもってるから、(聞き取れず) 帰化して生きるしかないみたいな、え、どうしようか、本当に真剣迷ってて、もう本当に帰化とかも考えたし

Gさんは、大学のときに在日韓国・朝鮮人の先生のゼミで勉強したことや在日団体の活動などを通して在日韓国・朝鮮人である自分を他人にも明かすようになった。ところが、就職活動の時期になってGさんは、本名で日本の企業に受かるわけがないと言う両親の話に不安になり、本名に変えた大学の登録名を通名に戻そうとし、帰化すべきなのか否かについても真剣に迷うようになる。Gさんにとってまだ経験したことのない日本社会は、両親から受け継がれてきた記憶に左右されていることがわかる。

G：あ、それが、就職活動したのは、日本語読みで就職活動して、それはやっぱりびびったことがあって、で、帰化するのも嫌だし、帰化するか、日本名に戻すのも嫌だし、かと言って、韓国語読みにする勇気もなかったから、ちょうど間とっていいこうみたいな感じで、で、ま、就職はそれで受かって、今の会社受かって、……で、韓国語読みで、内定式、内定式の時に変えた。ちょうど変える機会があったから、それで、なんか言われたら、もう、内定断ろうと思って、そうだね、……

本名を日本語読みにして就職活動した当時の自分の心境を「びびった」という単語で表現しているGさんは、内定が確定されてから本名を韓

国語読みに変えた。入社後にGさんは、社内で本名を名乗るなど自分のルーツを明らかにすることが珍しくないことやそれがもはや「問題視」されないことを経験するようになった。その経験は、Gさんが本名で働くことを心配する両親を「昔の人」「昭和の人たち」だと思おうようになった主な理由になっている。そこには、Gさんが生きる時代と親が生きていた時代とが異なるという感覚が内在している。「能力」に応じて就職できることを「自然な」経験として受け入れる感覚は、Cさんの語りからもうかがうことができる。

C：……そのあと、就職活動もありますよね、大学3年生の後半くらいから、で、ま、うちの姉、僕はお姉さんがいて、うちのお姉さんも普通に○○○○があるんですけども、それもちゃんとした会社でそういうところに、普通に○の名前で入ってたから、あの、ま、僕はそれがあたり前だと思っていたんですけど、ま、あの、ちゃんと就職ができて、上場企業に。それが両親からしてみると、自分の姉のときに経験があったにせよ、やっぱりまた、(Cさんが本名で大手の日本企業に就職できたことは)さらに驚きというか、ね、自分の両親は大学を出ても就職できなかったわけだから。大学の時代はそういうのもあります。それは僕にとってはすごく自然なことであった……(括弧内は、筆者の加筆)

Cさんは、両親の教育方針によって日本学校に通いながらも、生まれたときから本名を名乗りながら在日韓国・朝鮮人である自分を周りの人びとに隠さないまま育てられた。Cさんは、姉が本名で日本の上場会社に就職できたことを横でみていたこともあり、本名で就職活動するこ

とを不安に思っていなかった。Cさんが自分の就職に関する話を姉の経験と両親の反応を中心に語っていることからわかるように、在日韓国・朝鮮人として日本の企業に入ることは、両親にとっては——子供を本名で育てた親でさえ——「驚き」の出来事である反面、Cさんにとっては、「自然な」経験として位置づけられている。

自分のルーツを明かしていくことがもはや「マイナス効果」を与えないことは、日常のなかで通名を使っているAさんの経験からもみることができる。

A：……4年間歯医者さんで勤めたんだけど、普通に正社だったの。やっぱり正社で応募するときはきちんと履歴書に本名書いて括弧、○○○○と書いて履歴書を出したから、最初から、ほら、正社員だといろいろ手続きがあるのも本名が必要になるんでしょう……どうしてもしようがないと思ってそれで嫌われるんだったら、ま、それはそれでいいやと思ってたんだけど、それがこう、ダメだといわれたことがなくて

子どものときから日本人に負けるな、日本人の何倍も頑張らないといけないと教えられたことがどうしても抜けられないというAさんは、日本で就職することを考えてずっと通名を名乗ってきた。AさんもGさんのように就職する前は、書類上で自分のルーツを明かすことさえ不安に思うほど、日本社会で在日韓国・朝鮮人である自分を明かすことへの迷いが存在していた。そして、そこには、日本社会で生きるためには日本人の何倍も頑張らないといけないという親の経験が大きく影響していたと考えられる。ところが、上の語りからもわかるように、Aさん

は、在日韓国・朝鮮人であることで就職先から断られた経験をもっていない。職場で在日韓国・朝鮮人である自分を明かすことの「効果」についてAさんは、弟の例を挙げながら次のように話していた。

A：……就職のときはみんなちゃんと名乗ってやってるけど、本名でやろうとすることはないね。弟もないし、でも、弟もやっぱりずっと隠してるのも変なんだけど、実は僕こうですといたらあらって、すごい、逆に認められたというか、最初、なんだろう、やっぱりそれまでのやっぱ仕事の仕方とかがものすごいやっぱ頑張ってるから認めてくれるんだよね。

Aさんは、言葉がしゃべれない、なんの特技ももっていないという理由で日常では本名を名乗っていないが、職場で自分のルーツを明らかにしたことで「逆に」仕事の頑張りが認められた弟の例を挙げながら、「朝鮮人」であることが働く上では、ほとんど問題になっていないと語っている。ここには、「朝鮮人」であることがもはや「負のイメージ」と直結しなくなった現実に関するAさんの意識が表れている。

Gさん、Cさん、Aさんの経験が親世代から受け継がれてきた記憶の影響を超えて「定着している」ことについてどのように解釈すべきなのか。記憶は、世代を通して受け継がれてきたことであるが、経験は、国籍による制度的・行政的差別が緩和され、外国人人口が増えていった1980年代以降の日本社会の変化から大きく影響を受けたものである。エスニックな自分を隠さずに働き口を探していくことが必ずしも「マイナスの効果」を与えない社会を生きる若い世代のなかには、「朝鮮人」であるがために「能力」が正しく評価されないと考えている人は少ない。

そして、「負」の経験を積んできた親世代の記憶を心理的に「共有」しながらも、親の経験を「相対化<sup>6</sup>」し、自らが親とは違う社会状況に属しているという認識をもっているケースが多い。すなわち、「個」のレベルにおけるエスニック・アイデンティティが外国人「労働力」の増加と国籍による制度的・行政的差別の緩和という時代的背景に大きく左右されながら構築されていることがわかる。

それでは、日本社会における韓国と北朝鮮のイメージがそれぞれ分岐している2000年以降の状況は、在日韓国・朝鮮人の若い世代にどのような影響を及ぼしているのだろうか。「個」としての自分が認められていることで若い世代のアイデンティティはすべて説明されうるものなのか。

そこで、本論文では、在日韓国・朝鮮人のもつアイデンティティの「いま」を読み取っていくために、金奎一（1999）の議論を参照にしなから「エスニック」としての自己というもうひとつの軸を立てた。金は、「祖国」の問題にすべてのアイデンティティが還元されていた1世と若い世代とを比較しながら、若い世代が「個としての人間」「在日としての人間」「民族としての人間」という3つのカテゴリを同時に生きなければならない時代に属していることを指摘した。そしてこの3つのカテゴリが有機的に結び付けられることの必要性を主張している。ここで「在日としての人間」と「民族としての人間」は、両方とも「個」の領域を超えた「エスニック」の領域に属しており、その意味において若い世代のアイデンティティは、「個」という領域だけでは説明しきれない性質をもっていると考えられる。

在日韓国・朝鮮人の若い世代のもつアイデンティティを考える上で「エスニック」という軸は、なぜ必要であるのか。その「エスニック」としての自己を考えるとは、はたしてどういうこと



なのか。次章では、在日韓国・朝鮮人の若い世代のもつアイデンティティを「エスニック」という側面から捉えることが必要とされる2000年以降の日本社会における変化を指摘し、「個」としての自己と「エスニック」としての自己とがますます隔離されていく状況が在日韓国・朝鮮人の若い世代のもつアイデンティティに及ぼす影響を明らかにしていきたい。

## 5 「エスニック」としての自己——「極端」の状況を想定しながら生きるとは

これまで述べたように1970年代から1980年代にかけて活発に展開された権利擁護運動は、エスニック・アイデンティティを維持しながら日本社会の構成員として生きていくための権利を求めていた点において大きな意義をもつ。日本を生活の基盤としている圧倒的多数の在日韓国・朝鮮人の若い世代にとって、行政的・制度的差別の緩和された環境は、これまでとは比べられないほどの多様な場において日本人と一緒に学び、働き、意見を交わすことを可能にしてくれた。また、こういった経験こそが親世代のもつ「負」の記憶を超えたアイデンティティ形成に重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

ところが、個人レベルで周りの日本人と信頼関係を結んでいる若者が増えていき、「個」としての在日韓国・朝鮮人として働くことへの不安が減っているにもかかわらず、多くの若者たちが依然として日本国家に対する不信感を抱いていることも事実である。これは、在日韓国・朝鮮人という存在自体が国家レベルで残された植民地の歴史に由来していることや日本・韓国・北朝鮮の間で歴史認識が共有されないまま現在に至っていることに深くかかわっている。そして、2000年以降に日本社会における「祖国」

イメージが韓国と北朝鮮との間で大きく分岐していくなかで、こうした不信感も強まっていた。国家レベルの問題が解決に向けて進むことなく、「個」としてのアイデンティティが「定着化」しつつある「いま」の状況を在日韓国・朝鮮人の若い世代は、どのように経験しているのだろうか。本章では、自らコントロールできない国家レベルの動きのなかで「エスニック」としての自己に遭遇（encounter）していく在日韓国・朝鮮人の若い世代の語りを手がかりに、この問題を考察していきたい。まず、Cさんの語りからみてみよう。

C：こちら辺、ここ2002年以後ですけど、北朝鮮に関する話も増えたんです。2002年9月17日以後、で、うん。ま、悲しいときが多いですよ。……うん正直言って、ニュースをみて喜ぶ、喜ぶ、うれしいときあまりないんです。で、特に印象に残ってるのは、あの、その9月の17日に小泉さんが行って、5人かな、亡くなってる、拉致された人が、それは、すごく心に残ってたんです……僕の在日意識のなかではすごく大事なことです。すごくショック受けてましたから。

前章で本名のまま就職することを「自然な」経験として語っていたCさんは、2002年以降に増えた北朝鮮に関する報道が「在日」としての自己認識を左右するくらいの影響力をもっていたと述べている。これは、自分が「祖国」についても持っているイメージの影響より、日本社会における「祖国」イメージのもつ影響力が強いことを裏付けている。そして、この文脈において若い世代が北朝鮮に関する報道に遭遇することは、単純な悲しい経験のレベルを超える、エスニック・アイデンティティまでを揺るがす経験と

して位置づけることができる。日本社会における「祖国」のイメージは、エスニック・アイデンティティにどのくらいの影響力をもっているのだろうか。続けてBさんの語りをみてみよう。

B：日本で住んでみると、ま、大変ではないけど、あ、やはり自分の国ではない、私は、ここでずっと住んでもいいのかと思うときがある。最近、ネットで在日を攻撃するのがひどいでしょう。2ちゃんねるなどみると、私はあまり見ないけど、もし、犯罪が起きた、殺人起きたときは、また在日か、というでしょう。ひとつのなんというの、ネタみたいなものになって、私がそういうのが本当に嫌いで、ま、避けようとしてもどうしても見えるときがあるから。それで、ここで私と話している日本人も家に帰ったら「今日はなんか朝(ママ)の女」がどう、と書くんじゃないのか、もう人を疑ってしまう。そういう自分も嫌いだし。(ハンダで行われたインタビュー、筆者訳)

幼稚園から高校まで民族学校に通い、現在、日本の大学院で研究を進めているBさんは、「韓流」ブームをきっかけに日本社会における韓国のイメージが良い方向へと変わりつつあることをうれしく思いながらも、韓国と北朝鮮がもともとひとつの国であることすら知らない日本人が多いことについて戸惑いを感じていると語っていた。Bさんは、語りのなかで北朝鮮の「拉致事件」が日本で報じられてから日本における北朝鮮のイメージが悪化され、なにか問題が起きるたびにいつも「また在日か」と思われることが嫌だと述べている。ところが、その嫌な気持ち、不安をとまなう緊張感であり、日常で「普通に」話していた人までを信じなくさせる主要な要因になっていた。ここでBさんが語ってい

る不安は、Cさんが感じていた危機感や緊張感よりもはるかに深刻なものであり、その深刻さは、これから日本でずっと住んでもいいのだろうかという根本的問題を自分自身に問い続けていることからもうかがえる。

CさんとBさんが語る不安をとまなう危機感や緊張感は、2000年以降の日本社会の変化を抜きにしては考えられない「負」の意識である。そして、こうした不安は、個人レベルにおいてエスニック的要素のもつ影響力が小さくなっていく状況と「同時に」経験されるものであるからこそ、上の世代が経験したことのない、時代性を帯びたものだといえよう。この文脈で日本社会における「祖国」のイメージが大きく分岐する2000年以降の変化は、「個」として認められていた若い世代を再び「エスニック」な領域に追い込んでいるのではなからうか。引き続き、Dさんの語りをみながら「エスニック」としての自己認識が「個」としての自己認識に及ぼす影響について考えてみよう。

D：私、最近はずうんだけど、まえ、その日本の人と結婚生活は想像ができない子だったの。本当に1、2年前まで、で、それを、あの、日本の子と話したのかな、その子はすごく寂しがってね、お前がそうやって壁作ってどうするんだ。お互い理解し合えないんじゃないかみたいなの。でもね、例えば、うちの友たちとか好きだよ。でも、結婚して例えばね、何かが起きて、朝鮮人とか、そういう韓国人とかそういうのを捕まえようとする戦争とか起きたらどうするって。とか言ってたの。そのときさって。誰も助けてくれないでしょう、日本の人はって。(6秒沈黙)言ってる悲しいけど。だから、なにかあるときに、在日は在日同士だと言っちゃった。極論を言うと。何か戦争が起

きて、たとえば、私たちどうなるのって。捕まえるかもしれないし。(10秒沈黙) そんなことはないと思うけど。極端に言ったらそうだね。

Dさんにとって日本人との結婚は、「個」として日本人と結べるもっとも信頼性の高い関係である。そのために、小さいときから「在日と結婚するんだ」と両親から言われ続けてきたことを覆し日本人との結婚が想像できるようになったことは、大きな変化だといえる。ところが、Dさんが心配していることは、日本と「祖国」との関係が極端な状態に陥った場合であっても、自分が日本社会の構成員としていられるのかという問題である。

ここで注目すべきことは、Dさんが感じている不安そのものが「個」として日本人と在日韓国・朝鮮人は理解し合えるという前提に立っていること、そして、極端な例として出された「戦争」が個人の意志を超えた動きを表していることである。すなわち、Dさんの不安の根底に、日本と「祖国」との関係が危機に直面した場合であっても自分が「個」としてみられ得るのか、「エスニック」な自分としてしかみられないのではないかという、「個」と「エスニック」との意識断絶が存在していることを指摘しなければならない。

在日韓国・朝鮮人の若い世代が経験する「エスニック」としての自己との遭遇は、国家レベルの極端な状況を想像するケースにとどまらず、実際の生活領域にも存在している。日常的なかで「エスニック」な存在としてみられるのは、どのように経験されているのだろうか。続けてHさんの語りをみてみよう。

H：中学校のときに電車に乗ってたら、チョゴリ切られて、チョゴリで通学するんですけど、チョゴリ切られたり……

筆者：自分が？

H：わ、私じゃないけど、友達が、で、私は自転車乗ってると、朝鮮学校ってわかるんですよ、すぐ。なんか、お前ら帰れ、みたいな。石投げられたり、そういうことがよくあって、それで今はチョゴリなくなって、あの、日本の学校みたいな、制服になったんですよ。そういう事件があってから。そうですね。(4秒沈黙)

……

筆者：さっき日本の学校に行くのは考えたこともないし、日本人と結婚することも怖いかそういうふうに言ったじゃないですか。そういう考えっていつ、いつごろから？自然に？

H：いや、自然に？差別を実際受けてから、それまではなんとも思わなかった、それ怖いとか、なんも思ってたんですけど。

筆者：あ、その中学校の頃のそういう？

H：そう、ですね。なんか一気に臆病になったというか……べつにみんなが怖いわけじゃないけど、そのバイト先で出会った子とかは、べつに遊んだり、一緒に楽しくは過ごすけど、なんかこころ開けないというか、やっぱり日本人は日本人、悪い人ばかりじゃないけど、日本人のなかでも、なんかその事件あってからは、やっぱり、ちょっと、自分からは話そうと思わなくなっていました。(5秒沈黙)

Hさんは、小学校から高校まで大阪にある民族学校に通い、朝鮮大学校への進学をきっかけに東京に住むようになった。北朝鮮の「拉致事件」が連日報じられるなかで友達のチョゴリが切られたことを横でみていた経験と、自転車通学のときに「知らない」日本人から「お前ら帰れ！」といわれ石を投げられた経験は、Hさんのその後の日本人に対する意識の大部分を作り上げて

いる。大学生になって本名でバイトをするようになったHさんは、同年代の日本人と知り合い、プライベートでも一緒に遊ぶほど仲良くなった。ところが、Hさんが語っているように、親しい日本の友達ができる前に経験した「知らない」日本人からの差別は、仲良くなった周りの日本人にも心を開けないようにする主な理由として作用していることがわかる。

また、Hさんの語りのなかで、一緒に働いているバイト先の人に対する感情が自分を攻撃した「知らない」日本人に対する感情と重なり合っていることは注目に値する。「一緒に楽しくは過ごすけど……やっぱり日本人は日本人」という語りからもうかがえるように、Hさんが感じている戸惑いのなかには、「エスニック」な存在としてみられていた経験が大きな影響を及ぼしていた。ここには、周りの日本人と一般の日本人を括って考えることも、まったく別の存在として考えることも容易ではない現実が反映されており、「個」と「エスニック」としての自己の隔離は、Dさんの語りからも同じく発見されていた問題である。

これまでみてきたように、自分のルーツを守りながら日本社会の構成員として生きていこうとする在日韓国・朝鮮人の若い世代にとってこうした2000年以降の変化は、日本と「祖国」との関係が危機に陥るときであっても自分たちが日本社会の構成員としていられるのかという根本的な問いを生み出した。また、日本社会の構成員となることが在日韓国・朝鮮人である「個」として制度的・行政的差別なしに働ける環境の整備だけでは成し遂げられないものであることも明らかになった。

「個」としての自己が安定し、「個」のレベルにおける日本社会への信頼が定着しているいまの状況のなかで、「個」としての自己と「エスニック」としての自己との隔たりは、国家レヴ

ェルでの緊張感——「拉致問題」をめぐる2002年以降の日本と北朝鮮との緊張関係など——が増すほど大きくなってしまふ。「個」の側面では、在日韓国・朝鮮人でありながらも日本社会の構成員であることに疑問をもたない若い世代が、日本と「祖国」との緊張関係に直面したときに「エスニック」な存在としてしかみられないかもしれないという不安を感じながら生きることは、エスニック・アイデンティティの安定的形成や定着に深刻な問題を作り出す原因となっている。

そして、ここでは、「個」としての自己と「エスニック」としての自己との間に存在する断絶にどのように折り合いをつけていくのかという課題が浮上してくる。ところが、「エスニック」としての自己に遭遇するケースのほとんどが「個」レベルではコントロールできない領域に属し、また、ここで大きな影響を及ぼしている北朝鮮の問題が簡単に解決できない状況に置かれていることは、「個」と「エスニック」との間で折り合いをつけていくことの困難をそのまま表している。自分でコントロールできない「エスニック」領域の問題が彼／彼女らをどれほど不安にさせているのか、その不安の意味について考えなければならない理由がまさにここにある。

## 6 おわりに——時代性を帯びるアイデンティティ論へ

本論文では、1970年代から1980年代まで繰り広げられた権利擁護運動の経験が在日韓国・朝鮮人のアイデンティティに関する議論に及ぼした影響を議論の土台にしながら、在日韓国・朝鮮人の若者のもつアイデンティティの「いま」を、「個」と「エスニック」という2つの文脈から論じた。本論文を通して明らかになった在日韓国・朝鮮人の若い世代のもつアイデンティティの特質は、以

下の二点にまとめることができる。

第一に、国籍による制度的・行政的差別が緩和され、日本における外国人「労働力」が急速に増え始めた1980年前後に生まれた世代にとって「個」の在日韓国・朝鮮人として日本社会で働くことは、「自然な」経験であり、その経験を通して親の記憶が「相対化」されていることが明らかになった。4章でも述べたように、記憶は、世代を通して受け継がれてきたことであるが、経験は、国籍による制度的・行政的差別が緩和され、外国人「労働力」が増えていった1980年代以降の日本社会の変化から大きく影響を受けたものである。エスニックな自分を隠さずに働き口を探していくことが必ずしも「マイナスの効果」を与えない社会を生きる若い世代は、「朝鮮人」であるがために「能力」が正しく評価されなかった記憶をもつ親世代に共感を示しながらも、自らが親とは違う社会状況に属しているという認識をもっていることがわかった。

第二に、「個」のレベルで在日韓国・朝鮮人であることにほとんど不安を感じない在日韓国・朝鮮人の若者が、日本社会における「祖国」の「負」のイメージについては、強い不安を感じながらアイデンティティを構築していることがわかった。ここで彼/彼女らが感じている不安は、「個」と「エスニック」との断絶のなかで強くなっているものであり、「個」のレベルまでを左右する力をもつものとして語られていた。5章でも言及したように、「個」の側面では在日韓国・朝鮮人でありながらも日本社会の構成員であることにほとんど疑問をもたない若い世代が、日本と「祖国」との緊張関係を直面したときに「エスニック」な存在としてしかみられないかもしれないという不安を感じていることが、エスニック・アイデンティティの安定的形成や定着に深刻な問題を作り出す原因となっている。

最後に、本論文で論じた「個」としての自己と「エスニック」としての自己との隔たりが国際人権規約の批准のような日本社会の変化や、「市民」としての権利をめぐる「在日」の権利擁護運動の成果なしには考えることができない、「個」として生きることが可能になった時代だからこそ浮き彫りになった問題であることを強調しておきたい。また、在日韓国・朝鮮人の若い世代が直面しているこの問題が在日韓国・朝鮮人の問題にとどまらず、日本に基盤を置いて生きる多くのニューカマーも経験している、あるいは、これから経験していく問題であることも指摘しておかなければならない。本論文で明らかになった、時代と相互作用しながら構築されていくエスニック・アイデンティティの特性に焦点を当てながら、今後は、「個」としての自己認識と「エスニック」としての自己認識との断絶に折り合いをつけていく具体的なプロセスについて研究を進めていきたい。

## 注

<sup>1</sup> 世界人権宣言の内容を基礎としてこれを条約化したものであり、人権諸規約のなかで最も基本的かつ包括的なものである。社会権規約（経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約）と自由権規約（市民的及び政治的権利に関する国際規約）という2つの規約で構成されている。1966年の第21回国連総会において採択され、1976年に発効し、日本は1979年に批准した（外務省、2012、外務省ホームページ、2012年3月20日取得、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kiyaku/index.html>）。

<sup>2</sup> 「ノウハウ」という言葉は、長年の間、市民運動の専任スタッフとして活動してきた在日韓国・朝鮮人とのインタビューのなかで使われた言葉である。「ノウハウ」という言葉は実際のインタビューのなかで次のように語られていた “……市民活動とか、市民運

動している団体からいうと、特に人権問題とか、やっぱり在日の存在というのは、キーパーソンで、やっぱりそこで経験したことで語れることもあるし、話せることもあるしそれこそ当事者にもなったりするじゃないですか、その入管法の問題とか外国人登録問題とか、えと、それとかは当事者になるからいろいろ自分の経験したこと話して、そこで、やっぱり日本人ではない自分の役割とか、……他の団体の人に対して、在日ってこんな考えてるんだというのが、……ということでは在日の市民活動、在日が日本の市民社会、市民運動のなかで果せる役割というのをなんとなく感じてきました。”(1974年生まれ、男性、在日3世、民族学校の経験なし、2010年5月14日のインタビュー)

<sup>3</sup> 1959年から1984年まで行われ、北朝鮮への「帰国事業」を通して北朝鮮に渡った在日朝鮮人とその家族は、日本人の妻を含めて総計9万3340人にのぼる。「帰国事業」が実施されるようになった背景と事業が行われた過程に関する詳しい分析は、金・高柳(1995)、テッサ(2007)、菊池(2009)などを参照。

<sup>4</sup> 「在日」という言葉は、在日韓国・朝鮮人問題を扱う多数の研究においてその意味が説明されている。当初「在日を生きる」というキャッチフレーズとして使われ始めた「在日」という言葉は、その後、日本人でもなければ本国の人とも違う在日韓国・朝鮮人の位置を表す言葉として用いられるようになった。「在日」という言葉について尹(2001)は、日本に定住するようになった在日韓国・朝鮮人が1970年代以後、主として日本に住む朝鮮人を指す言葉として使い始めたと指摘し、「在日」という言葉が「朝鮮」籍や「韓国」籍という国籍(表示)の違いを超えて、在日朝鮮人を総称するだけではなく、とりわけ、若い世代の生き方を示す一定の思想やイデオロギー、ないしは、歴史的意味合いを含むものとして認識されてきた点を強調している。一方、福岡(1993)の場合、ほ

んらいその国への一時的滞在を意味する「在日本」から由来した「在日」という言葉を、日本人側がなんらかの疑問も抱かずに使いつづけることの背後には、在日韓国・朝鮮人を日本社会のメンバーとして認めようとしなないメンタリティが透視されていると述べている。このような分析は、日本において定住者・社会の構成員としての位置を獲得していこうとする在日韓国・朝鮮人の意志とそれを阻んでいる日本社会のメカニズムとの関係をよく表している。

<sup>5</sup> 例えば、1980年代に特集で帰化同胞の問題を扱った在日韓国・朝鮮人向けの雑誌のなかには、以下のような語りが収録されている。“……就職の時とか、もちろんしてからもそうですけど、上司とか友人が私のことを普通の日本人として本当に見てくれているんだろうか、と、不安に思うことがあるんですよ。つまりね……どこか少し、冷たいんじゃないか、と。周りの日本人の方もね、なんかこう、私に対してちょっと奇妙な感じというか、違和感をもっている、というのがわかるんですよ。……実は今、復籍したいと思ってるんですが、兄とそのことで話をしてみましたら、そんなことするならもう絶縁すると言います。(高校一年の時に帰化した人の語り)”これ以外にもその記事のなかには、日本の大学を出て、親ともども家族で帰化した人でその後日本と韓国との板ばさみになって精神病院に入るほどまでに追いつめられてしまったケース、帰化後に在日社会から「裏切り者」とみなされてしまったケースなどが紹介されており、帰化が日本人と韓国人としての二重生活を強られる耐え難いことであったことを明らかにしている(『ウリ生活』5: 94-105)。

<sup>6</sup> 「相対化」という言葉は、長年にわたって在日韓国・朝鮮人との問題を取材しながら、多様な在日韓国・朝鮮人と交流を行ってきた日本人のジャーナリストとインタビューしたときに使われた言葉である。そのジャーナリストは、2000年以降の日本社会における変化が在日韓国・朝鮮人の若い世代に及ぼした影

響について次のように述べている“中学生や高校生は社会よりも家庭のなかで時間を過ごしている……大学に入ってから、家庭にいるより社会にいる時間が長くなる。家庭のなかでハルメ（祖母）とハラボジ（祖父）の経験をよく聞いてそれが在日韓国人の経験だと一般化してしまった子供たちが社会に出ていろんな人びとと出会い、日本の社会を経験しながら

それを相対化していくことになる。”（男性、40代、2012年3月20日のインタビュー）以上のような語りからもわかるように、社会に出る前の若い世代は、家族構成員のもつ経験に影響を受けている。そして、若い世代のもつ意識に影響を及ぼす対象は、祖母と祖父に限ることなく親世代も含まれていると考えられる。

## 文献

- C, ダグラス, ラミス・姜尚中・萱野稔人, 2009, 『国家とアイデンティティを問う』岩波書店.
- Chapman, David, 2008, *Zainichi Korean identity and ethnicity*, London: Routledge.
- 曹慶鎬, 2012, 「アイデンティティの形成と『本国』イメージの問題——在日朝鮮人と朝鮮半島」宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公正な社会とは——教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』人文書院.
- 福岡安則ほか, 1991, 『在日韓国・朝鮮人問題をめぐる社会学的研究——「在日」若者世代の葛藤とアイデンティティの多様化』昭和63年度～平成元年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書.
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人』中央公論社.
- Glazer, Nathan and Moynihan, Daniel P. eds., 1975, *Ethnicity: theory and experience*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (= 1984, 内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』三嶺書房.)
- Gans, Herbert J, 1979, "Symbolic ethnicity: the future of ethnic group and cultures in America", *Ethnic and Racial Studies*, 2(1): 1-20.
- Hall, Stuart, 1996, "Introduction: Who Needs 'Identity'?" Stuart Hall and Paul Du Gay eds., *Questions of Cultural Identity*, London: Sage, 3-17. (= 2001, 柿沼敏江ほか訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題——誰がアイデンティティを必要とするのか?』大村書店.)
- 原尻英樹, 1998, 『「在日」としてのコリアン』講談社.
- イ・ハンジン (清水由希子訳), 2008, 『韓流の社会学——ファンダム、家族、異文化交流』岩波書店.
- 板垣竜太, 2008, 『「嫌韓流」の解剖学——現代日本における人種主義・国民主義の構造』徐勝・黄盛彬・庵道由香編『「韓流」のうち外——韓国文化力と東アジアの融合反応』御茶の水書房, 99-113.
- 岩淵功一, 2004, 「韓流が『在日韓国人』と出会ったとき——トランスナショナル・メディア交通とローカル多文化政治の交差』毛利義孝編『日式韓流——「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房, 112-53.
- , 2007, 『文化の対話力——ソフト・パワーとブランド・ナショナリズムを超えて』日本経済新聞出版社.
- 鄭甲寿, 2005, 『<ワンコリア>風雲録——在日コリアンたちの挑戦』岩波書店.
- 鄭瑛恵, 2003, 『<民が代>斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.
- 姜在彦, 1996, 『「在日」からの視点』新幹社.
- 菊池 嘉晃, 2009, 『北朝鮮帰国事業——「壮大な拉致」か「追放」か』中央公論新社.
- 金賛汀, 1977, 『祖国を知らない世代——在日朝鮮人2, 3世の現実』田畑書店.

- 金奎一, 1999, 「再論・再考すべきはなにか——'99 在日シンポ参加者の皆さんのために」『ウリ生活』14: 256-314.
- 金敬得, 2005, 『新版 在日コリアンのアイデンティティと法的地位』明石書店.
- 金知榮, 2010, 「在日韓国・朝鮮人の『韓流』経験がナショナル・アイデンティティに及ぼす影響——ブームとしての『韓流』経験と日常文化としての『韓流』経験との比較を中心に」『日本都市社会学年報』28: 135-50.
- 金明秀, 1995, 「在日韓国人の学歴と職業」『年報人間科学』16: 39-56.
- 金時鏡・尹健次, 2005, 「<対談>『在日』を生きる」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店, 407-51.
- 金英達, 1990, 『在日朝鮮人の帰化』明石書店.
- 金英達・高柳俊男, 1995, 『北朝鮮帰国事業関係資料集』新幹社.
- Mannheim, Karl, 1928, "Das Problem der Generationen", *Kölner Vierteljahreshefte für Soziologie*, 7: 157-85. (= 1976, 石川康子・鈴木広・川崎嘉元・朝倉恵俊訳『マンハイム全集 3 ——社会学の課題』潮出版社.)
- 大沼保昭・徐龍達, 2005, 『新版 在日韓国・朝鮮人と人権』有斐閣.
- 朴一, 1999, 『<在日>という生き方——差異と平等のジレンマ』講談社.
- 桜井厚・小林多寿子編, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
- Somers, Margaret R., 1994, "The narrative constitution of identity: A relational and network approach," *Theory and Society*, 23(5): 605-50.
- 孫歌, 2008, 『歴史の交差点に立って』日本経済評論社.
- 宋連玉, 2008, 「在日朝鮮人にとっての<韓流>」徐勝・黄盛彬・庵途由香『「韓流」のうち外——韓国文化力と東アジアの融合反応』お茶の水書房, 237-50.
- Stephen, Cornell and Douglas, Hartmann, 1998, *Ethnicity and Race: Making Identities in a Changing World*, Thousand Oaks: Pine Forge Press.
- 田中宏, 1994, 『在日外国人 新版——法の壁、心の溝』岩波新書.
- 谷富夫編著, 2002, 『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房.
- Taylor, Charles, 1992, *The Ethics of Authenticity*, Cambridge, Mass: Harvard University Press. (= 2004, 田中智彦訳『<ほんもの>という倫理——近代とその不安』産業図書.)
- テッサ・モーリス・スズキ(田代泰子訳), 2007, 『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社.
- 尹健次, 1987, 『異質との共存——戦後日本の教育・思想・民族論』岩波書店.
- , 2001, 『「在日」を考える』平凡社.
- 在日同胞の生活を考える会編, 1989, 「特集——帰化同胞は語る」『ウリ生活』5: 94-105.
- , 1999, 「在日同胞シンポジウム『在日』としていきることの意味を考える——日本国籍者の急増と同胞結婚の激減について」『ウリ生活』14: 2-123.

(きむ じよん、一橋大学大学院博士課程 日本学術振興会特別研究員 (DC2)、sd091023@g.hit-u.ac.jp)  
(査読者 明戸隆浩、曹慶鎬)



## **Between the Oneself as an “Individual” and “Ethnic”**

An Analysis on the New Aspects of “Zainichi” Ethnic Identity of Young Generations

*KIM, Ji Young*

This paper aims to delve the new aspects of ethnic identity troubles of young generations who were born around 1980. The reason why I concentrated on the generations around 1980 is that these generations have little experienced the discrimination by nationality and started to contact with Japanese society by getting jobs or part-time jobs after 2000 which has divided the images of “mother country” in Japanese media circumstances by “Korean wave” and “kidnaping of North Korea” . In this paper, I used two axis “individual” and “ethnic” paying attention to the change of social environments of Japan. Through the analysis, it becomes clear that a lot of young generations are troubled with “ethnic” side and the trouble caused by the bad images through the relation between Japan and “mother country” .